

【書評】

須川亜紀子『少女と魔法 ガールヒーローはいかに受容されたのか』

2013,NTT 出版

Representations of Magical Girls and Japanese Female Viewership 評者 向井颯一郎

「魔法少女になりたい！」——女の子ならだれでも一度は、箒に乗って空を飛んだり、ほしいものを手に入れたり、カワイく変身したり……というファンタジーと戯れる「魔法少女」のまねごとをしたことがあるのではないだろうか。「魔法少女」とは、一般に、文字通り「魔法を使う少女」のことである。日本では、少女が魔法を駆使して大活躍する「魔法少女」アニメジャンルが四十年以上も続いている。(p2,第一章より)

本書は、このような背景から、テキスト分析とオーディエンス調査を併用して、女の子向け「魔法少女」テレビアニメにまつわる問題群にアプローチしているものである。また、本書は著者の「Representations of Girls in Japanese Magical Girl Animation Programmes from 1966 to 2003 and Japanese Female Audiences' Understanding of them」という博士論文を元に、大幅に修正を施したものである。

第1章「ガールヒーローとしての「魔法少女」研究—本書の目的と構成」においては、全体的な本書の見通しについて述べられている。著者によれば、本書の目的は2つある(p9)。第一に、「日本の女の子向け「魔法少女」テレビアニメにおける魔法少女は、どのように表象されてきたかを、その作品が放映された時代の社会文化的コンテクストにおいて、通史的に分析すること」である。第二に、そのような魔法少女表象を、「日本のプレティーンの少女がどのように、理解、交渉、享受、共鳴、消費、利用をしてきたかを析出すること」であると述べられている。

第2章「少女」と魔法と〈フェミニズム〉——「少女」文化における魔女」では、日本の「少女」文化の構築、「フェミニズム」運動、大衆文化における魔女と魔法の表象について論じている。まず1920~1930年代の西洋イメージ、少女文化の構築を考察している。その次に、1980年代の「カワイイ」という審美観を大量消費社会との関連で分析した後に、日本のエリート主導の「フェミニズム運動」と一般女性の相違について論じており、最後に西洋から輸入された魔女と魔法のイメージの発展について概観している。

第3章「女の子向け「魔法少女」テレビアニメの表象分析—サリーからどれみまで(一九九六年から二〇〇二年まで)」では、女の子向け「魔法少女」テレビアニメ六作品を、放映当時の社会文化的コンテクストにおいてテキスト分析している。量的調査(アンケート)において各世代で人気が高く、なおかつ少女のフェミニティ構築の重要な要素が表現される場としても機能しているというのが大きな選択理由であるとしている(p11)。

第4章「女の子向け「魔法少女」テレビアニメに関する女性オーディエンスの理解」では、第3章でなされたテキスト分析と比較しながら、成人女性への個別インタビューと、少女たちへのフォーカスグループ討論における言説を分析している。

第5章「二〇〇二年以降の女の子向け「魔法少女」テレビアニメ」では、2003年以降の

「魔法少女」テレビアニメを概観した後、より長く続いた『プリキュア』シリーズから三作品のテキスト分析をしている。著者によれば、2003年以降の「魔法少女」は、多様性が進んでおり、新たな方法論を探るための試論という位置づけになっている(p14)。

第6章「まとめと展望」においては、各章を改めて概観し、本書の意義と今後の展望について考察している。特に第4章でなされたオーディエンス研究から、著者は3つの結論を出している。1つめに、女の子向け「魔法少女」テレビアニメにおける「西洋」の魔女と魔法の表象は、日本のフェミニティとそれに対抗するオルタナティブなフェミニティの間でなされる交渉の、重要な場として機能しているということである(p268)。2つめに女の子向け「魔法少女」テレビアニメにおいて、変身はセクシュアリティとファッション表象に結び付けられてきており、変身は「自己」を表現し、肯定する場として機能していたということである(p271)。3つめに、女の子向け「魔法少女」テレビアニメにおける女性の団結は、肯定的に表視されており、また「母親的」ケアと思いやりを、女性キャラクターと父親キャラクターの両方に関係させていたことである(p272)。そして最後に本研究における課題である、調査範囲の限界、またインフォーマントの記憶の限界について指摘し、稿が閉じられている。

本書における意義としては、「魔法少女」というジャンルについてのオーディエンスを世代で区分した上で、メッセンジャー=デイビスの方法論にならい、量的調査と質的調査を組み合わせる研究していることである。著者も述べているが、そもそも子供とテレビに関する調査は、主に実験心理学の領域からのものが多く、子供がそもそも実際にテレビのコンテンツをどう捉えているかという視点のものはあまりなかったと言える (p163)。

最後に本書における問題点を述べておきたい。第一に筆者も触れているが、カルチュラル・スタディーズという英国の理論を援用して日本のテキストとオーディエンスを研究する有効性である(p275)。宮台真司はカルチュラル・スタディーズを「英国人の自己反省ツール」と挑戦的に呼んでいるが、その文脈で日本に輸入された概念を、日本のオーディエンスに適用することの妥当性や有効性はもっと検討されるべきであろう。そもそも日本のアニメーション等のコンテンツが、その無国籍性から受け入れられたという指摘を考えると、ジェンダーという点を鑑みるにしても、オーディエンスの社会文化的な文脈から探るといふカルチュラル・スタディーズの視点はあまり意味をなさないことになってしまう。

第二に、グローバルなオーディエンスを視野に入れていないことにある。現代において日本のアニメーションを視聴する層は、日本に在住するものに限らない。インターネットを通して、世界中にオーディエンスが存在し、なおかつ様々な年齢層に視聴されていることを考えると、女の子向け「魔法少女」アニメだからと言って、そのまま研究において「女の子」にオーディエンスを絞ることの妥当性はどれだけあるのだろうか。日本においてさえ、「魔法少女」アニメを見ている層は、俗に「大きな友達」と呼ばれる成人男性の可能性もある。むしろここまでの幅広い視聴者層を、なぜ「魔法少女」アニメが獲得しえたか、また性差によってその視聴経験の違いはあるのかなどを探る必要があると考えられる。